

平成18年度 第1期展

Ça C'est Paris サ・セ・パリ：

清川泰次が写したパリと藤田嗣治のアトリエ

会期：4月1日(土)～7月23日(日)

入場者数：1,932人

担当者：高嶋雄一郎

1954年にアメリカのシカゴやニューヨークにおける三年間の制作活動に終止符を打ち、単身フランスに渡って荻須高德らと藤田のアトリエを訪れた清川は、当時にしてすでに世界的に高名であった画家がデッサンを行なう姿を何枚となく写真に収めている。当時清川が使用したステレオ・リアリストは、1948年に発売された特殊な二枚組の写真を撮影するためのカメラであり、専用のビューアーで見ると奥行きのある画像が楽しめるものだ。清川はそのカメラを使って数多の光景を撮影した。ヨーロッパ中を写したそれらの写真は、その希少性ゆえに子供向けの雑誌から地理の教科書、当時のファッション誌など様々な雑誌に引用されている。

本展では、清川泰次が撮影した藤田嗣治のパリのアトリエ風景、そしてその街並を記録した写真を中心に、当時の旅行の資料、そして藤田直筆の手紙も併せて展示した。



B2ポスター



B3ポスター



チラシ



1954年 撮影：清川泰次



展示風景



平成18年度 第2期展

Once upon a time in America 清川泰次が見た

会期：7月29日(土)～11月26日(日)

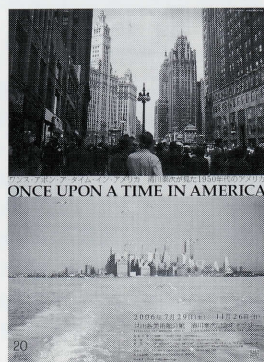
入場者数：963人

担当者：高嶋雄一郎

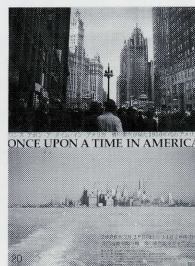
清川泰次は、資生堂画廊での個展や読売アンデパンダン展などへの出品を経て、1951（昭和26）年6月から約3年の間、アメリカ合衆国はシカゴに単身で渡る。彼はそれまで描いていた具象画に様々な疑問を抱いており、当時次々と海を渡って日本に流れ込んでくる同時代のアメリカ美術に触れ、またそれを習得すべく、アメリカを目指した。こうして彼は独自の哲学を獲得していく。

この傍らで彼は、趣味であったカメラで多くの現地での写真を残している。これらは、彼がいかにアメリカを“見た”かという貴重な資料写真であるだけでなく、戦後に比類なく隆盛を極めたアメリカを、日本人がどのように注視し、捉えたかという“肖像画”でもあると言える。そして同時に、そのゆとりある落ち着いた構図や繊細な色遣いからは、彼の描く絵画との関係性も窺えるだろう。以上のように、本展では1950年～60年代というその過渡期にかけて制作された絵画作品を始めとして、当時の写真、手記などを織り交ぜ、

清川泰次が如何にしてアメリカを見つめ、その影響を受け止めていったかを究明した。



B2ポスター



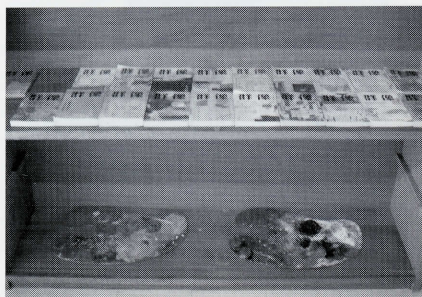
B2ポスター



チラシ



190年代 シカゴ 撮影：清川泰次



展示風景



平成18年度 第3期展

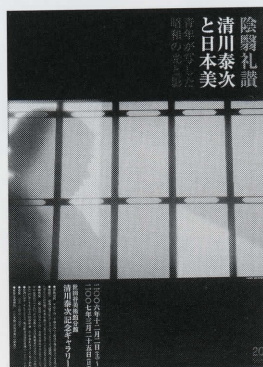
陰影礼讃：清川泰次と日本美

会期：12月2日(土)～2007年3月25日(日)
入場者数：1,104人
担当者：高嶋雄一郎

清川泰次(1919-2000)は、17歳の時に慶應義塾大学予科に進学、同大写真部に所属する。当時まだ高価だったカメラを渡欧した親戚に安価で購入してもらった清川は、何の気負いもなく自らの日常をモノクローム・フィルムに遺していった。白と黒だけでこの世界を焼き付ける術に直ぐに通じていった清川は、次第に“影”や“光”といった写真の根源的な要素へその関心を向けていく。目に見える対象を被写体とするのではなく、その対象が地面に長く落とした影をその主題としていったのだ。清川は、その初々しい純真たる好奇の眼差しで、こうした、見えているはずなのに見えていないもの、見えないはずなのに見えるものを軽やかに留めていったのである。

今回は、こうした“光”と“影”をテーマに選出した写真を展示した。同時に、1970年代に清川が描いた油彩画も展示し、それらに通ずる感性を考察している。これら両者には、清川個人のみならず、この国に特有

の美意識が相通じているとの思いから、かの谷崎潤一郎が記した日本の美意識に関する優れた評論からそのタイトルを引用した。



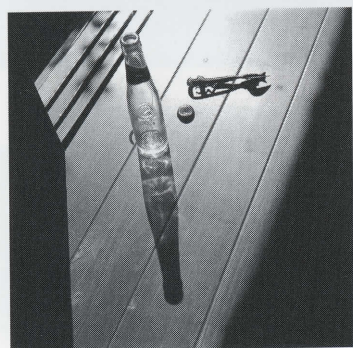
B2ポスター



B3ポスター



チラシ



1940年(昭和15年)ごろ
撮影：清川泰次

展示風景

